

由比正雪

村松友視

ShoSetsu 由比正雪 Yui

村松友視

ゆいしょうせつ
由比正雪

一九九二年（平成四年）二月八日 第一刷

著 者——村松友視

編集人——篠原義近

発行人——杉林 昇

発行所——読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の二
〒100—55

大阪市北区野崎町八の一〇
〒530

北九州市小倉北区明和町一の二
〒802

名古屋市中区栄一の二七の六
〒460

印刷所——大日本印刷株式会社

製本所——寿製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。

ISBN4-643-92003-3 C0093

©1992, MURAMATSU Tomomi

☆落丁・乱丁の場合は、お取り替えいたします。

Printed in Japan

由比正雪



装丁・長友啓典
イラスト・長友啓典
& 黒田征太郎
題字・望月美佐

Prologue

——プロローグ

(1)

一、由比正雪事、年四十余、がつそう、但、かみをそり候儀も可^レ有^レ之事
一、せいちいさく、色白、ひたいみしかく、髪黒、くちひるあつく候事
一、まなこくりくりといたし候由之事

由比正雪の風貌を知る唯一の手がかりは、駿府で自刃する少し前、謀叛^{むぼん}の疑惑によつて廻されたこの手配書くらいしか残されていない。がつそうは総髪のことであり、正雪については、山伏髪といった表現もあるが、たいていの者が髷を結っている時代には、きわめて目立ちやすい髪型と言える。背が小さく色白で、額が短かく唇があつく、まなこがくりくり……手配書からは、きわめてあざやかに由比正雪の風貌が浮かんでくる。

だが、一般的にいつて、由比正雪の姿かたちにはどのようなイメージがあるのだろうか。由比正雪とい

うユニークな名前は有名だ。名前だけを知っている人なら、相当の人数に及ぶだろう。だが、由比正雪は何をした人物かを聞かれて、慶安太平記、丸橋忠弥、クーデターなどが頭に浮かぶ人は、かなり限られた数になってくる。また、その風貌についてのイメージは、総髪、暗い表情というのが一般的ではなからうか。面立となつてくるとこれまた曖昧で、田村正和、片岡孝夫、役所広司、近藤正臣、松方弘樹……いろいろなタイプの正雪像が成り立ちそうだ。顔立が丸くあろうと尖つていようと、それなりの正雪があり得るとするのは、例えば面長の大石内蔵助はあり得ないというほどの固定イメージが、いまだに固まつていない証拠である。

手配書からは、唐十郎氏の佇^{たたずま}いを感じる。唐十郎氏にはかつて「由比正雪」という戯曲があり、初日の前夜に喧嘩をして自分の腕へ自らナイフを突き刺してしまった役者唐十郎の由比正雪が、縋帶で腕を吊つて舞台に登場したというエピソードが残っている。これなども、私にとっては由比正雪像の広がりのひとつになっている。

由比ではなく、由井としている人もいる。由比はもちろん、現在の静岡県庵原郡由比町、かつての東海道由比の宿だ。そこに生れたというので由比正雪……しかし、これはいわゆる慶安の変（一六五一）直後に書かれたものに多く、その踏襲もあつたためだという説がある。もうひとつの説は駿府、すなわち現在の静岡市に生れたとするものだ。静岡市の宮ヶ崎にその生家があつたとするものだが、両説にくつもの共通点がある。

まず、先祖がよく分つていない点である。正雪の祖父弥右衛門が豊臣家に仕えた者で、大坂落城後引つ込み浪人となり、駿府へやつて来て紺屋を始めたというあたりも、駿河由比の紺屋弥右衛門の子として生れた……とする由比説とかさなる。

駿府説では、駿府の紺屋の子として生れ、幼時、駿府の臨濟寺へ預けられる……となつてゐる。由比説では、正雪は由比にある臨濟宗の名刹林香寺へ預けられたとされていて、生い立ちの趣きが両説にお

いて大きく変化するとは思われない。

さらに、東海道という街道の運命をかきね合わせてみると、両説の境界線がますます滲んでくるのだ。

かつて、東海道は日本における街道の主役、横綱的な存在だった。広重の東海道五十三次絵図の頃、すなわち由比正雪が活躍したときにもかさなる時代は、もちろん東海道の黄金時代だった。京と江戸という重大地点を結ぶこの街道は、街道中の街道だった。

このイメージは、徳川時代が終り明治になってもつづき、東海道に鉄道が敷かれてからも、ずっと保たれていた。東海道五十三次の各駅と同じように、東海道本線の各駅は有名であった。人々は、沼津、蒲原、由比、興津、江尻、府中、鞠子、岡部……と頭に浮かべたように、清水、静岡、焼津、藤枝……とその位置を頭に描くことができたのだった。

ところが、新幹線、高速道路、それに飛行機の発達によって、人々の日本地図に対する感覚に大きな変化が起こった。北海道の富良野と羅臼、山陰の出雲と松江、北陸の金沢と富山、九州の大まかな地理関係……旅の変化は、かなり遠方の土地のイメージが人々の頭にあざやかに浮かぶという現象を生んだ。それにつれて、東海道各駅の影がきわめて薄くなっていったのである。

東海道の各駅は、現代人の旅の変化の中で、通過地点という趣きになっていった。かつては、宿場として通行人が泊る場所だったのが、泊ることのない、足を止めることのない、単なる通過点となった。そして全国の人々の視野の中で、蒲原、由比、興津、清水、静岡、用宗、焼津といった土地のイメージが、しだいにぼやけていった。

これが、現代の人々にとっての土地観として固まりつつある。由比正雪と由井正雪、由比生誕と駿府生誕、林香寺と臨濟寺……この具体的な相違は、現代から見ればさほど大きな意味をもたないように思えるのだ。正雪の研究家であるならば、それは立場を袂^{たもと}れさせるほどのことであるかもしれない。

しかし私は、いずこからともなく居ついて紺屋を営んだ浪人の子であり、幼くして寺へ預けられた子であり……といった共通点を重く考えたい。両説にかさなる同じ内容は、正雪の個性を考える上できわめて大事なことにちがいない。これをまず、頭に銘記しておこう。

さてしかし、その上に立つて、正雪が駿府に生れたか由比に生れたかを、ここで決めておかなければならぬ。そこを決めなければ筆が先へ進まないような気がするのだ。そこで、私は自分が育った清水という土地の視点に立ち帰って、駿府と由比のどちらを選択しようかと思案した。清水は、駿府と由比のちょうど中間にあり、両者を公平にながめる位置にあることに気づいたからだ。

私は、由比という町についての自分のイメージを、まずたぐり出すことにした。

由比は、私が住んでいた清水から各駅停車に乗って東京へ向かうときの、二つ目の駅だ。道路を行くならば、東海道の三大難所のひとつとして知られた薩埵峠^{さつたとうげ}を越えて行く。昔、漁師の網に地藏菩薩像がかかり、これを山上に祭ったことから、その名がついたという。南北朝時代には、足利尊氏と直義兄弟が戦い、戦国時代には、甲斐の武田、駿河の今川、相模の北条がこの峠を中心に攻防戦をくりひろげた。この難所も、今は車で登ることができるようになり、ハイキング・コースにもなっている。薩埵峠の上から富士山を臨めば、一大パノラマの様相をおびた絶景がひらけている。富士の裾野から右へつづく伊豆半島の遠望も見事なけしきだ。

薩埵峠の上からのながめで分るが、由比は駿河湾と山にはさまれたせまい帯状の町だ。清水に育った私だが、由比の町についての記憶はきわめて稀薄だ。中学生の頃に一度だけ、由比から浜石岳へ登ったことがあったが、あまりに近い富士山の姿におどろいたものだった。富士山といえば三保の松原越しと決めていた清水っ子にとって、単刀直入な富士山だけのあざやかすぎる姿が、何となく違和感のあるけしきとして目に映ったことを憶えている。

(由比正雪は、ああいう富士山を見て育ったのか……)

そう思うと、気持が由比へ傾いた。清水から見た富士と由比から見た富士……それこそ、全国的には何ら意味のない視点だろう。しかし、清水に育った者が由比正雪を書く場合、これはきわめてあざやかなイメージの相違なのだ。だが、さらに厳密に地元的アングルにこだわるなら、現代人が薩埵峠や浜石岳からながめる富士山と、由比正雪がながめた富士山とは、明らかに姿かたちが変わっているのである。富士山の、駿府から眺めて右側の中腹よりやや上方に、宝永四年に爆裂があり、その結果として瘤のごとき盛り上がりが生じた。宝永年間に出来たというので、この盛り上がりは宝永山と名づけられた。宝永四年は一七〇七年、將軍は綱吉だった。由比正雪は、慶長十年つまり一六〇五年の生れで、慶安四年すなわち一六五一年に自刃して果てている。したがって、由比正雪は宝永山のない、左右にすつきりとした稜線を見せる富士山を、ながめていたことになる。そして現代の静岡人は、宝永山つきの富士山をながめている……。

なぜ富士山にこだわるかと言えば、由比正雪の「正雪」という名だ。駿河湾に面した東海道の宿場は、およそ雪とは縁遠い温暖な地域だ。由比であれ駿府であれ、この条件は同じなのだ。そんな場所が生れ育った正雪が、のちにどうして「雪」を折り込む名をつけたのか。しかも、「正しい雪」という名前をつけている。ここに、正雪と富士山のつながりを意識したくなるのは、やはり私が富士山をながめる本場に育ったせいかもしれない。

清水の三保の松原からは、たしかに羽衣の松越しの富士山があざやかだ。そして、由比の薩埵峠からの富士山も、趣きの違う雄大な姿が見事だ。しかし、こと富士山に関して、駿府からのながめというのは、極め付という詞をつけるのに少しためらわれる。距離が微妙に遠くなり、その姿がやや小さくなるせいでもあるが、三保の松原や薩埵峠ほどにあざやかな視座が、見当たりにくいのだ。

由比正雪が、正雪の名を富士山の雪を思い浮かべてつけたとするならば、その生れ育った地を、駿府でなく由比とする方が、どうやらふさわしいように思える。だが、これはあまりにも富士山と正雪を強

引に結びつけた言い方であり、その根拠もあいまいだという説もあるだろうし、私とて証拠があつての主張というわけではない。

しかし、その頂^{いたゞき}に雪をのせた、美の統一を体现しているような富士山と、穏やかな駿河湾の広がり、そこに生れ育った少年に何かをそそのかす根拠となつていたのではないかという思いはたしかにある。いささか私好みではあるが、それは仕方あるまい。

山と海には生まれ、山の向こうには富士山が聳えている。稜線がなだらかに裾へ広がっているが、その富士の裾野では、かつて曾我兄弟の仇討ちがあつた。静かな海の向こうに見える伊豆は、そのむかし源頼朝が挙兵したところだ。山と海のあいだには、東海道という街道があり、江戸や大坂や京の人々や品々が行つたり来たりしている。宿場の者にとつての東海道は、上りも下りもする文化の巨大な川のごときものであつた。その東海道と山のすき間みたいな部分で、人々は生活を営んでいた。生活の源はいえ、おそらくは山地の農業と、駿河湾における漁業だつたろう。

そんな環境で育った少年の心が、美の象徴然とした富士山にも仇討ちをかさね、穏やかな伊豆のけしきにも頼朝の挙兵をからめる……そのような白日夢的時間をもてあそぶのに、由比という場所はきわめてふさわしいのだ。あまりにも壮大な、あまりにも意味ありげな風景が、少年の心を人さらいのように遠くへ誘ひ出すことは、十分にあり得るという気がするのだ。

片や駿府は家康の隠居城であり、駿河大納言こと徳川忠長の怨念はただようものの、やはり穏やかな城下町といった世界だ。

忠長は徳川秀忠の第三子で、父母に愛され秀忠の世子に擬せられたが、祖父家康の配慮によりの子の家光である兄竹千代が世子に定められた……と伝えられている。元和二年（一六一六）甲斐に封じられたのち、信濃、駿河、遠江^{とろしま}の地を加増、やがて五十五万石を領するようになった。駿府城に住し、権大納言従二位に叙任して、駿河大納言といわれたが、長じてほしいままに家士を殺傷するなどの非行が

あり、寛永八年甲斐に、そして寛永九年に上野こうずけの高崎に幽され、翌年十二月自刃した。

父母に愛されながら、祖父家康の竹千代に対するこだわりのため、屈折した人生を送らざるを得なかった駿河大納言忠長は、駿府城においても無念の日々を過したにちがいない。その怨念のけはいは、当然のこととして駿府の町にもただよっていたことだろう。

忠長は慶長十一年、由比正雪は慶長十年の生れだ。ほぼ時を同じくして生れたこの二人に、何がしかの因果関係を見たい気もするが、両者を結びつけるのは少しばかり無理があるようだ。由比正雪は、慶長十年に生れたが、意外に早く江戸へ出ている。元和五年には江戸へ出たとされているから、およそ十四歳の頃だ。そして、歴史の表面上の記録では、討幕計画決行のため慶安四年に四十七歳で足を踏み入れるまで、駿府の地へは戻っていない。

風の噂で、正雪もおそらくは駿河大納言のことを聞いていたことだろう。そして、育った土地に近い「駿河」の名をもつ忠長に、いささか特別な感情を抱くことがあったとしても、さして不思議とは思えない。しかし、具体的に由比正雪が駿河大納言忠長を意識するということは、まずなかったであろうと推測するのが自然だろう。

こうやって考えてゆくと、由比正雪と土地との結びつきは、やはり由比の方が強いように思われてくる。

(それにしても……)

私は、堂々めぐりをした想いを一応、由比という土地に戻してみて、あらためて心の中で呟やいた。それは、宝永山のない富士山の姿は、いつたいどんなだったかを思い浮かべることができないためだった。ただ、富士山の右肩から宝永山という瘤を掻き消してしまえばいいのだが、それがなかなか出来ないのだ。私は、幼時から宝永山のついた富士山を打ちながめて育った。日本一の富士の山……というときにも、右肩に宝永山をつけた富士山しか生じない。いま、清水を遠く離れ富士山の反対側である東京

に暮しているが、目を閉じて瞼に浮かぶのは、宝永山つきの富士山なのだ。そして、その美の象徴と言われる富士山を、私は気持の芯のところで少しばかり嫌っているふしがある。

おさまり返り、平安を形であらわしたような駿河側から見た富士山に、分りやすすぎる美しさを感じるせいかもしれない。嘘みたいに美しい富士山が、本当にそこにある……三保の松原からながめて、そんな屈折した思いに浸ることもあった。だが、どこか好きになれない気分が生じるのは事実だ。

それでは、山梨の側から見た富士山が好きかといえば、そういうことでもなさそうだ。これはこれで、あまりにも分りやすい勇壮美というふうにながめてしまう。山梨の側からの富士山が男っぽいから、駿河の側からの富士山は女っぽいのだろうか。あの、平安を形であらわしたような富士山は、それだけの世界ではなさそうだ。

私は、目を閉じて瞼に力を入れた。すると、瞼の奥に奇妙な三角形が生じて、ゆらゆらと揺れた。その揺れる三角形の右肩には、小さな瘤がついていた。それをじつと睨んでいると、その瘤がしだいに消えていった。瘤のない三角形は、さらに激しく揺れはじめたが、やがてその揺れが止んだ。宙空に、瘤のない三角形が貼りついたようになった。それは、明らかに宝永山のない富士山だった。完璧すぎる形ゆえにいかかわしさを放つ富士山は、頂に雪をのせて艶然と微笑みかけているようだ。その手招きに応じて、にやりと笑って立ち上る由比正雪の表情が、目の裏側に大きく広がっていった。その風貌は、手配書に記された特徴とは、少しばかり異っていた。

(2)

薩埵峠から富士山をながめ、にやりと笑って立ち上る由比正雪の総髪姿が、不意に幼ない子供の姿に

変った。子供は、ふたたび地面に腰を下ろし、富士山へ目を投げた。そして、その目を由比のあたりへ移動させ、じつと睨むようにしていた。私は、自分の目に映った少年を、由比正雪になぞらえて、しばらく立っていたらしい。薩埵峠からの富士山の右肩には、ちゃんと宝永山がついていた。

薩埵峠から見おろすパノラマ的景観は、やはり、名所というだけのことがあった。そのむかし難所だった趣きは残っていないが、けしきだけはさほど変わるまい。もっとも、けしきというものは見る者の意識、心理、感覚によっていくらでも変化する。かつて幼ない正雪がながめた目にかさねようとしても、それは無いものねだりだった。

富士山、伊豆半島、駿河湾……それらの壮大なながめの中に、東名高速、国道一号線、東海道線が走り、細長い由比の町がかるうじて見てとれる。かつての「さつたちぞうみち是より四丁」と記された石の道標が、遠景の派手さにくらべて、やや遠慮がちに建っていた。広重の「由比薩埵の嶺の図」は、おそらくこのあたりからのながめだろうと言われている。

「すごいでしょう」

私は、いきなりうしろから声をかけられ、思い入れを見透かされたみたいな気分になって、おそろおそろふり返った。そこには、ジャージーに身をつつんだ瘦身の老人が、につこり笑って立っていた。老人にしては、背筋がしゃきつとしていて、妙に健康的な姿に見えた。老人はこの峠をジョギングでもしてきたのか、息を荒くしているのだが、決して苦しい表情ではなかった。笑顔の中にやけに白い歯が、強い印象を与えていた。

「すごいって、ここからのけしきですか……」

私は、老人の表情を探りながら言った。

「もちろんです。このパノラマは美しいでしょう」

老人の声は、目の前の私に向って喋っているのに、遠くへとどけるように大きくひびいた。私は、あ

の少年がおどろいたのではないかとふり返ったが、さつき少年がしゃがんでいたところには誰もいなかった。私は、首をひねって少年を目で探した。

「どうなさいました……」

老人が、怪訝そうに私をのぞき込んだ。

「いや、そこに子供がいたのでしょう……」

「子供？ そんなものはいませんでしたよ、わたしが見たのはあなた一人だ」

「でも、さつきそこへ腰を下ろしてですね」

「気のせいでしょう」

「……」

「こういうところへ来ると、人は幻想を見なくなるんですよ」

「幻想を……」

「あまりにも現実ばなれした世界ですからなあ」

老人の口から、『世界』という言葉が出たのが意外だった。

「何だか、自分の足が宙に浮いてしまふんですよ。そうすると、見てもいないものを見たような錯覚をもってしまう」

「そういうもんですか」

「あなた、土地の者じゃないんでしょ」

「ええ。でも、むかし清水に住んでましたから」

「むかしねえ、むかしだったって昭和でしょう」

「そりゃまあ、そうですね……」

「近頃の人は、簡単にむかしって言葉をつかうからねえ」

「すみません」

「いや、あやまるには及ばないだけんね」

老人の口から、初めて静岡弁が出た。清水に育った私としては、なつかしい言葉だった。おそらく、幼い頃の由比正雪は静岡弁をつかっていたのだらう。だが、長じてからの由比正雪に静岡弁は似合わない。江戸へ出て、軀から静岡弁が抜けたのか抜けなかったのか……私は、またもや想念の中で迷子になりそうになった。

静岡弁というけれど、訛りがあるわけではない。いくつかの方言の代表が、よく鮎屋のノレンに染め抜かれたりもしているが、それはほとんど極端な例だ。むしろ、話す調子や抑揚にその特徴があるような気がするが、静岡と清水でも微妙にちがう。由比の言葉もまたそれなりの特徴があるにちがいないが、おおむね清水弁に近いのではなからうか。自分自身のことを考えてみると、小学一年から高校三年までつかっていた清水弁は、すでにすっかり軀から抜けてしまっているという感覚がある。

日常的にはそうなのだが、テープに吹き込まれた自分の喋りを聞いて、「静岡の喋り方だ」と感じるものが、ごく稀にある。

（由比正雪だって、おそらくそんな感じだったんだろうな……）

私は、あれこれと思い巡らしたあげく、由比正雪の言葉づかいを想像していた。しかし、静岡弁というのはおそらく庶民の言葉であって、養子とはいえ武士の子となった由比正雪は、いわゆる武家言葉を使用していたはずだ。駿府は家康の隠居所であったことだし、訛りのない土地柄であれば、言葉における由比正雪の特徴というのは成り立ちにくい……私は、自分の思いを自分でもみ消して、大きく息を吐いた。

「あなたは、何の目的で来られた？」

老人の張りのある声が、私を現実へ引き戻した。いつのまにか、老人はさっきよりも私に近づいてい

た。白すぎる歯が、やはり笑っていた。だが、老人の目に先ほどよりわずかながら、熱がこもっているようだった。

「実は、由比正雪に興味がありましてね」

「ほう」

「由比の町には、生家が残っているらしいんですよ、それで……」

「紺屋さんですよ、十八代目」

「あ、そうらしいですね」

由比の町に由比正雪の生家である紺屋が残っていることは、おぼろげながら知っていた。十八代目の人も、江戸時代から使われているという、柿の渋紙で作られた染型によつて、三百余年受け継いできた家業を営んでいる。そのことを私は、何かで読んだことがあったのだった。

「生家へは、行かれたんですか」

「いや……」

「それじゃ、わたしが案内してさしあげましょう」

「……」

「生家である吉岡家では、正雪の命日と言われる旧暦七月二十六日に、毎年供養をつづけているだけですね」

「はあ」

「あの、正雪が幼ない頃、由比の名刹である林香寺へ預けられたのをご存知で？」

「ええ、静岡の臨濟寺という説もあるらしいですね」

「説はね」

「あなたは、やはり由比説を……」